In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	かかり續貂 ： 源承歌論の一意義
Author	谷山, 茂
Citation	人文研究. 14 巻 4 号, p.312-330.
Issue Date	1963
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	橋本元二郎教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

かかり續貂

――源承歌論の一意義――

谷山　茂

連歌論・能楽論における「かかり」の意義とその重要性については、すでに故能勢朝次博士の「かかりの藝術的性格」注①と題する、すぐれた考察がある。ただし、同論考中に「良基の和歌の師である頓阿の歌論にはこの語はなく、二條為世のものや京極為兼の歌論にも、この語は見えてゐない。従って、この語が歌学の方面から発達して來たものとは考へ難いので、むしろ庶民階級の方面で用ひてゐた言葉が、地下の連歌師などによって採用せられて、連歌上の用語となって來たものであるまいかと思はれる」と述べられたのは、いささか訂正を要するであろう。実は、源承和歌口伝（日本歌学大系巻四・所収）にも、すでに風姿の属性を意味するかと思われる「かかり」の用例が見られるからである。

×

もちろん、「かかり」が一般的用語として、「掛」「係」「懸」などの義で用いられた例は、古代から頻繁に見られる。しかし、それらがどうして風姿の義に用いられるようになったかは、あきらかでない。あるいは、連歌論・能楽論に頻出する特殊な用語としての「かかり」（風姿の義）は、一般用語としての「かかり」（掛・係・懸などの義）とは、全く語源を異にし、また語源は同じであるにしても成長の場を異にしていたのかもしれない。

しかしながら、掛・係・懸などの義の「かかる」が、その連用形から「かかり」という名詞に転成したばあいに、単に

「かかること」の義のみではなくて、「かかっている状態・様子」、さらにいえば「かかり具合」とか「かかりの風姿」とかを意味すると思われる用例は、すでに平安朝の貴族文献のなかにも、すくなからず見られる。能勢博士も女性の髪の美を示す語として、髪のかかりばなどということばがあったことに着目されているが、その点でもまず若干の續貂をこころみると、

① けざやかなる髪のかかりの、すこしさはらかなるほどに薄らぎにけるも、いとどなまめかしさ添ひて、なつかしければ、（源氏物語・初音）

② つらつき花やかに匂ひたる顔もて隠して、すこしふくだみたる髪のかかりなど、いとをかしげなり。（源氏物語・幻）

③ はづかしく思してうちうつぶし給へる、髪のかかりかんざしなど、なほいとありがたげなり。（源氏物語・宿木）

④ 三位の、われもかうの衣（きぬ）どもに紅のうちたる、赤色の唐ぎぬ著給へる、なほいと清げに髪のかかり肩つきなど、人にすぐれたまへり。（栄華物語・蜘蛛のふるまひ）

などの、「髪のかかり」は、詳しくいえば、髪のかかり具合、または髪の垂れかかっている風姿をいっているかと思われる。同様に、

⑤ 山吹のにほひ、青きひとへ、えび染の唐ぎぬ、白腰の裳著たる若き人の、額のかかり、姿よそほひなど、人よりはことに花々と見えしを、いまだ見じとて、人に問ひしかば、小督の殿とぞ聞きし。（建春門院中納言日記）

⑥ とりどりに見えし中に、小宰相殿といひし人の、鬢・額のかかりまで、殊に目とまりしを、（建礼門院右京大夫集）

等の「額のかかり」も、額髪または蔽髪が垂れかかった様子・風姿をいったものとおもわれる。注②

しかも、これらの例で、女性の髪の美しさを、特に「かかり」において見出そうとしている意識について、今すこし考えてみる必要があろう。もちろん髪の美しさが、その長さとか色とかにおいて把握された例は、また枚挙に暇がない。しかし、その美しさを特に「かかり」のなかに見出そうとしているばあいの志向には、髪が額とか肩先とかに垂れかかって

さゆらいだりする美しさ、あるいはそういう動きをもった美しさに心惹かれるものがあったのかもしれない。さらにいえば、それは、額や肩先に垂れ懸った髪が、髪そのものだけの美しさというよりも、額や肩先との関連照応において醸し出す美しさに、焦点をあわせているからだと考えられる。すなわち、髪は髪単独の美しさもあるが、それが額や肩先にこぼれ懸ることによって、その額や肩先の様態と相応じて、さらに一段と微妙な美しさを発揮することに注目しているのでないかと思われる。このように考えてくると、「かかる」ということは、それ自体において、必然的に二つ以上の物と物、事と事とがかかわりあう場を構成し、その相互関連のなかに一つの気分や風姿を醸し出す機能を持っているといえるだろう。のみならず、⑤⑥などにおける「額」は、額髪の謂であるとすれば、それ自体においてすでに額に垂れかかっている髪を意味するので、もはや「額（髪）のかかり」とまでいう必要はなかろうと思われるのであるが、それでもなお「かかり」ということばを入れていることを考えると、それは髪そのものというよりも、むしろその「かかる」ことの風姿なり風趣なりを強調しようとしているのではあるまいか。

以上の「かかり」は、髪のばあいに限られた用例ではあったが、ただ「かかり」といっただけで、懸ることによって醸成される風姿・風趣までを含めて意味するばあいもあったことを指摘したにすぎない。しかし、こういう「かかり」の用例からすれば、後世それらがむしろ懸るという本義から遠ざかって、風姿などの義、しかも能勢博士がいわれたような、流動的な様態の美を意味するに至る可能性を、多少とも内包していたかと考えられる。のみならず、⑤⑥などにおいて、「額のかかり」というようなことばの結合が生まれると、その「額」は額髪または蔽髪の義と知っていても、――まして、それを忘れた時代や階級の人々にとっては尚更のことだが、――そういう結合形式自体が、連鎖的に「家のかかり」「門のかかり」「聲のかかり」「句のかかり」などという結合の生まれる素地を作っているとも考えられる。

また、能勢博士は書紀に見える「神がかり」ということばにも注目されて、それらの「憑（つ）く」とか「憑（よ）る」とかの意の「かかり」は、連歌や能の「かかり」との語源的連関は考えられないにしても、性格的に酷似するものがあることを指摘

されている。しかし、この「神がかり」というばあいの「かかり」も、その本義はやはり寄り懸るということにあったのではあるまいか。すなわち、神が人間に寄り懸って、人間が神のような存在となり、神のような行動をすることであろう。そして、すくなくとも、この「神がかり」という詞の接續形式も、また後世の「女がかり」「鬼がかり」などという連語を可能ならしめる素地の一つであったろう。

更に、平安時代には、

⑦ 昨夜（よべ）かの一条の宮にまうでたりしに、おはせし有様など聞え出で給へるを、ほほ笑みて聞きおはす。あはれなる昔の事かかりたる節々は、あへしらへなどし給ふに、（源氏物語・横笛）

などという例も見られる。もちろん、ここの「かかり」は名詞化したものではなくて、動詞「かかる」の連用形である。そして、ここでは、今日のことばでいえば、関係する・関連するというような意味で用いられている。しかし、これもまたもともとは寄り懸ることが、必然的に関係する・関連することをも意味するようになったのでないかと考えられる。すくなくとも、この「昔の事かかりたる」は、もっとくだいて、昔の事をしのばせる――昔風な、などと換言することもできるであろう。また「昔の事かかりたる」などという言い方が可能であれば、ここからもまた「昔かかりたる」「昔がかり」「近江がかり」などという連語を可能ならしめるであろう。

要するに、「かかり」という語は、古くから広範多岐な振幅をもって用いられているようだが、とくに「額のかかり」「神がかり」「昔の事かかりたる」などのそれは、発展的に、和歌・連歌・能における「かかり」と無縁ではなかったであろう。とくに、風姿とか風趣とかは、単一のものの場でも見られはするが、それはさらに個と個とが相互に懸り合い呼応する場において、より美しく豊かに発現しやすい。――というような認識が、時代環境のなに固成してくれば、個と個とが相互関連して風姿・風趣を構成する場たる「かかり」が、直ちに風姿・風趣を代弁することは不可能でも不自然でもなかったろう。そして、文化史的にながめれば、中世という時代は、ものの価値を、個の絶対的な場にというより

も、個と個との相対的な場に認めようとした時代である。

注① 雑誌「幽玄」第一巻第三号（昭和二十一年八月）以下に連載。なお、同氏著『能楽芸道』（昭和二十九年十月刊）にも所収。

② これらの例における「額」（ひたひ）は、装具の蔽髪のことか、それとも生身の額髪のことか。装身用具としての額については、和名抄に「蔽髪比太飛 蔽二髪前一為レ飾也」とある。しかし、提中納言物語（貝合）に、「さし出でたる人、わづかに十三ばかりにやと見えて、額髪のかかりたる程よりはじめて、この世のものとも見えず美しき」と見える額髪は、もちろん生身の額髪のことであろう。また、更級日記に「髪いと長く、額いとよくかかりて、色白く、きたなげなくて、さしもありぬべき下仕へなどにてもありぬべしなど、人々あはれがるに」などと見える額も、生身の額髪のことであろう。

×

源承は、その和歌口伝（愚管抄）に、すでに「句のかかりよろしからぬ歌」という一章段を設けて、若干の説明を加えながら、その具体例をあまた掲げている。このように、一章段の標題の中にさえ、「かかり」という詞が用いられているとすれば、当時の歌界、すくなくとも源承周辺の歌人仲間では、これはすでに新しい和歌評論語として承認されていたのではあるまいか。しかも、結論を先にいえば、その「かかり」はだいたいに姿とか風とかの属性を意味し、また、より端的には姿とか風とかとも換言しうる性格をもっていたようである。そこで、源承のいう「かかり」の属性を具体的に検討する前に、凡そ「姿」と呼ばれているものについての私見を提示しておく必要があろう。

歌における様・姿・風躰・風姿などに関する歌学的認識は、すでに古今序以来の歴史的な歩みをもっている。いわゆる姿は、作品を印象的に享受する側からながめると、それはまず表現の結果的なものとして認識されやすい。しかし、それをさらに表現の方法的過程と関連せしめていえば、姿は心と詞との融合統一の世界に成立するものだというふうな見方が、一般的にもほぼ承認されている。しかも、表現の方法的過程との関連において、とくに姿を心の側面から分析すると、それは主れは主として意味・趣向・風情・余情などの構成または醸成の場において把握され、詞の側面から分析すると、それは主

として文字つづき・詞つづき・つづけがらなどという接続または構成の場において把握されることが多いと考えられる。しかも、前述の如く、姿はとかく表現の結果的なものとして認識されることが多いので、姿はどちらかといえば、その形象面、すなわち心よりも詞の側に、より多く、より直接的につかながるものとして把握される。漠然とながら、古代の評論家たちの多くも、そういうふうに把握していたのである。注①

ところで、その姿の属性に対する具体的な分析が、歌論史のなかで飛躍的な前進をとげたのは、やはり詞の側との直接的な関連において、その詞の側の新古・雅俗などの問題――それは引いては心の側の新古・雅俗などの問題と対比される問題ではあったが、――をめぐってである。その詞の問題をめぐっての両極端な見解が激しく対立し、もはや作品の普遍的価値判断の基準を見失いかけた危機においてである。その危機は具体的には俊頼・基俊の両判者の対立時代にあったわけだが、その前後の歌人たちは、多かれ少かれ、詞そのものの新古・雅俗などが、必ずしも心の新古・雅俗などを拘束し切らないという事実を、それぞれの作歌実践のなかで、真剣に反省しなければならなかったようである。そして、その危機を、主として詞の側から乗り超える道を、「詞つづき」「つづけがら」の世界に見出したわけである。この詞つづきへの開眼は、個々の詞の新古・雅俗などの可否の問題、ひいては心と詞との対立をめぐっての問題を、おおかた解消すると共に、詞の側に直結する姿の具体的属性を飛躍的に分明ならしめ、姿における二元的な心と詞との違和を多少とも緩和している。もちろん、詞そのものの新古・雅俗などの問題は、平安初・中期の歌合判詞や歌学書のみで終焉したのではなくて、世が下っても、程度の差こそあれ、依然として繰返された問題ではある。しかし、平安末期・鎌倉期になると、詞そのものに優劣・可否があるのではなくて、詞つづき・つづけがらに問題があるのだという自覚、引いては詞つづきこそ趣向や風情に直結しうる場だという自覚が、歌合判詞はもとよりのこと、一般的な歌論書でも、しきりと主張されるようになっている。たとえば、

○　歌の詞に、「らし」「かも」「いも」「べらなり」「まにまに」「いまはただ」「みわたせば」「ここちこそすれ」「わびしりかけ

り」「つつ」「そも」、これらはおぼろげにては詠むまじと古き人々申しけりとぞ承りし。これまた古き歌になきにあらず。（中略）これらにて心をうるに、よくつづければ各とも聞えず。あしう続けつれば各とも聞え、あしうつづけつれば「花ざくら」といふも、「てる月」といふも、聞きにくくこそはおぼゆれ。（中略）つづき、聞きにくくとりなしつれば、げにあやしともや申すべからむ。

（俊頼髄脳）

○ただいかなることもよくつづければあしくも聞えず。（奥義抄）

○つづけがら善悪ある事。歌はただ同じ詞なれど、つづけがら、言ひやうにて、よくもあしくも聞ゆるなり。（長明無名秘抄）

○させる風情もなけれど詞よくつづけつればおのづから姿にかざられて、この徳を具することもあるべし。（長明無抄秘名）

○詞つづき妙なる歌。（中略）ことなる風情なけれども、詞妙なれば姿にかざられて、艶気自らうかべり。（中略）その歌の姿にしたがひて、詞つづきも同じ様によみかなへるがよきなり。（瑩玉集）

○おほよそいづれの詞もつづけがらによるなり。よき詞・わろき詞と定め侍る事なかれ。（八雲御抄）

○おなじ風情なれど、わろくつづけつれば、あはれよかりぬべき材木を、あたら事かなと難ずるなり。（中略）上手といふは、おなじことを、聞きよくつづけなすなり。（詠歌一体）

○すべて詞にあしきもなくよろしきもあるべからず。ただつづけがらにて、歌詞の勝劣侍るべし。（毎月抄）

などと繰返されているのである。これらの諸発言には、おなじように「つづき」「つづけがら」などとはいっていても、またそれぞれにニュアンスをもっている。しかし、概していえば、いずれも歌における詞つづき・つづけがらの重要性を認め、それへの開眼によって、詞そのものの側の袋小路を打開し、それを心の側の趣向風情などにも直結させようとしていると見られる。

ところが、これらの詞つづき・つづけがら自体の具体的属性となると、また自明なようで、なお十分に分明だとも言い切れないものがある。今、源承以前において、歌合の各判者が詞つづき又はそれに類する語を、どのような意味で用いていたか、ただおおよそに一瞥してみると、たとえば、

「つづきをかし」（応徳三年三月若狭守通宗朝臣女子達歌合）、「文字つづき優なる様に見え侍る」（元永元年十月二日内大臣家歌合）、「文字つづき硬げにぞ聞ゆる」（同上）「文字つづきささへたる」（同上）、「文字つづき苦しげ」（保安二年九月関白内大臣家歌合）、「詞つづきぞ手づつに見ゆめる」（大治三年二月永縁奈良房歌合）、「文字つづき硬げにてたをやかならず」（大治三年八月西宮歌合）、「文字つづきやすらかにも聞えねば」（同上）、「文字つづき言ひなれたる」（長承三年九月中宮亮顕輔家歌合）、「言葉つづき言ひしりてやすらかに聞ゆ」（永万二年中宮亮重家朝臣家歌合）、文字つづき、ただものをいへるやうに」（嘉応二年十月住吉社歌合）、「詞つづき言ひしり強く聞え侍り」（承安二年十月広田社歌合）、「詞つづき文字すくなに聞えてよろし」（同上）、「詞つづきやすらかにはくだれど」（治承二年三月別雷社歌合）

等々のごとくであって、詞つづきの聲調的な属性についていった場合が多いようである。しかし、なかには詞つづきの意味的風趣的な属性に触れているかと思われるものもある。特に「つづけがら」といえば、単なる「詞つづき」以上に、複雑微妙なものを含むのはもちろんのことであり、前に掲げた諸歌学書における「つづけがら」の属性は、単なる声調的な要素を越えて、趣向風情的な要素にせまる傾向が強いともいえるだろう。注②

注①　たとえば、一首を批評する場合に、「姿詞よろし」というふうに姿と詞とを一連のものとして評している例は枚挙に暇がないが、「姿心よろし」などといっている例は、それほどには多くない。のみならず、一首をその心詞姿の三者にわたって批評する場合には、「恋の心はみゆれど、姿詞優ならず」（元永元年十月二日内大臣家歌合）などというふうに、姿詞を一括して、これを心と対比せしめている例が見受けられる。

②　とくに俊頼髄脳では、また「おほかた歌のふしはともかくもいひがらなめり」ともいっているが、その「いひがら」は、もはや声調的な属性であるよりも、めずらしいふしを生む趣向的風情的な属性を意味するだろう。

×

さて、源承口伝に「句のかかりよろしからぬ歌」として数多の具体例を列挙しているもののうち、ここに若干を抄出してみる。——

①　雲こそは空になからめあづまののけぶりもみえず夜半の月影　注①

此歌、初句よろしからざるよし申し侍りき。

②露ふけばあら野に來てはいかゞ寝む柴かりもて來いほりせむ子ら

初五字、新古今家長朝臣（をざさが原に露ふけにけり）歌の詞を、前中納言　不二庶幾一由申置きて侍るを、聞きて、わざとはじめに置ける也。[注②]

③そめし秋の露はあらしの山風に木の葉の色をうづむ朝霜

判云、[注③]同五文字、六字七字もよまぬには侍らねど、ながく聞え侍ること至要なきにや侍む。（下略）

④うき世をば花みてだにとおもへどもなほすぎがたく春風ぞふく[注④]

「だにとおもへども」といへる、かゝり不レ宜。

⑤遠近のはなみるほどに行きやらでかへさはくれぬ志賀の山ごえ

判云、[注⑤]「花見るほどに」といへる、無下にたゞ詞にや。

⑥君が代はすゑの松山はるゞ〳〵とこすしら浪のかずもしられず

先人云、此歌第二句年來思ひわかず侍りける。前中納言、日吉社にまうでて十禅師の御輿屋に通夜して侍りけるに、夜深て社壇に、舞女、此歌をたび〳〵たかくいへりけるに、「君が代はすゑの」といへる、第二句のかかりよろしからぬ歌也。歌とがめ侍りけるよし、愚老、先人のともに御輿屋に通夜して侍りしとき、かたり出でて、俊頼朝臣撰歌にもあやまりは侍りけるとぞ申侍りし。詞のかゝり能々可二用意一也。[注⑥]

⑦あはでのみとしふる郷の軒の草かれぬわするゝことの葉もうし[注⑦]

「軒の下草」は見なれて侍れど、たゞ「のきの草」すこしきゝなれずや。

⑧あけがたのあまのとわたる月影にうき人さへやころもうつらん[注⑧]

是は世にも秀逸と思へるにや。しかるに、衣笠内府「『うき人さへや衣うつらむ』といへる、無下の傾城かな」と侍りける由、先人語り侍りき。

⑨草はみないりぬる磯のなみまくらねられぬ夢ぞみらくすくなき[注⑨]

「ねられぬ夢」こと葉つゞき不レ宜也。是程之難は殊沙汰侍りしを思ひたがへられて侍りけるにや。

⑩ いさいかに深山のおくにしをれてもこゝろしりたき秋の夜の月

判云、「しりたき」といへる、雖三俗人之語一未レ詠三和歌一之詞歟。かく初五字又不三甘心一。[注⑩]

⑪ 難波がたうきて思ひのいかばりあしわけを舟さはりあるらん[注⑪]

「さはりあるらん」といへる、少よはくや侍らむ。

⑫ をはりの句に「月のそら哉」「月の夜の空」「かねの入あひ」「おもはるゝかな」「ことさらにこそ」などいへる歌、あまたきこゆ。尊海法印[注⑫]とて南都の好さ侍りしが、仁治の比「秋の夕暮」と詠めるは常の事とて、「夕暮の秋」とよみて侍りしかば、前中納言、返々不レ可レ然とぞしるし侍りし。「鐘の入あひ」「明ぼのの春」などもよろしかるべきや。

以上に抄出した若干の例だけに照らしてみれば、源承が「句のかかりよろしからぬ」といったばあいの、その「かかり」は、おおまかに風または姿と換言しても、まず不当ではあるまい。しかし、源承のいう「かかり」の属性を、今すこし詳しく知るためには、以上の諸例のうちでも、⑨のばあいが、最も好都合な手がかりとなるであろう。すなわち、源承は⑨の歌の第四句「ねられぬ夢」について、「言葉つづき不レ宜也」と評しているのである。いかにも、先行勅撰集では「ねられぬ夜」「ねられぬ寝」などと續けた例はあっても、「ねられぬ夢」と續けた例は見られない。源承もおそらくそういう点で納得しかねたのであろうが、それを「言葉つづき不レ宜」といったことは、また彼がこの一類の標題において「句のかかりよろしからぬ」といったことの、最も端的な説明であったろう。さらにいえば、源承は、ここに、「かかり」というものの具体的属性が、従来のことばでいえば、「詞つづき」にあることを告白しているとも見られる。次に、④の例についていえば、「花見て」「だに」「と」「おもへども」などの各語句は、もちろん古歌にも言ひ馴らされており、源承としても、それらの個々が不可だというのではあるまい。彼としては、やはり「だにとおもへども」と續けた、その詞つづきを肯定しかねて、しかもこの「だにとおもへども」は第二句から第三句へかけての、いわゆる句またがりになっているので、その声調的な不安定をも含めて、「かかり不レ宜」と評しているかと考えられる。また①の「雲こそは」がよろ

しくないというのも、「雲」「こそ」「は」の各単語がよろしくないなどとは、もちろんいえないはずであり、やはり、特になだらかであるべき初句に、注⑬早くも押しつけるように「雲こそは」と提示した續けがらがよろしくないと咎めているのであろう。その他の例においても、ほぼ同様にして、それらにおける「詞つづき」、または「つづけがら」に難があるといっているようである。

かくて、源承のいう「かかり」の主なる具体的属性は、だいたいに「詞つづき」――つづけ様・言い様・つづけがら――にあったかという見当がつけられる。また、源承が「かかり」を重視する志向も、すでに述べた「詞つづき」「つづけがら」に対する諸先輩の自覚とそれを重視する精神とを継承していると見られる。しかも、詞つづきは、心と詞との融合統一の世界に成立する姿なるものの属性を、主として詞の側面から構成する方法的過程に即して、具体的に分析し限定したものである。したがって、源承のいう「かかり」は、また姿と直結し、おおまかにはこれを姿とか風とかと換言することも許されるわけであろう。

しかし、そうであるならば、源承は何故にそれを従来の姿における「詞つづき」の問題として提示しなかったのか。その点を考えるに当っては、前掲の「句のかかりよろしからぬ歌」どもの具体例を、更に詳しく検討してみる必要がある。源承のいう「かかり」が、従前の「詞つづき」「つづけがら」の流れを汲んでいるらしいことは、見当ちがいでないにしても、彼が「かかり」という名のもとに、具体的に「詞つづき」「つづけがら」を問題にして行くにあたっては、大別して二つの観点がみられるようである。たとえば①④および⑫のうちの「ことさらにこそ」などのように、主として声調的な面から、詞の音調・語感のつづき方がなめらかであるか耳ざわりであるかを問題にしている場合と、⑥⑦⑨および⑫のうちの「鐘の入相」などのように、主として意味的な面から、詞の論理的あるいは趣向風情的な心象のつづき方の当否を問題にしている場合とがある。前者については、蛇足を加える必要もあるまいが、後者については、なお若干の吟味をこころみねばなるまい。たとえば、⑨の「ねられぬ夢」に対して、「ことばつづき不レ宜」といったのは、果してその声調的

な続き方が生硬で聞きにくいといったのであろうか。個人の主観的享受はなるべくつつしみたいが、私的な感覚から言えば、この「ねられぬ夢」という語感のつづき様は、むしろなだらかにさえ聞える。そこで、源承が、この「ねられぬ夢」の詞つづきをよろしくないといったのは、むしろその論理的意味の接続に無理があることを指摘したのではあるまいかと考える。すなわち、「ねられぬ」が「夜」などの詞を介在せしめないで、直ちに「夢」に続くこともすでに問題であったろうが、かりに「ねられぬ夜の夢」と続けたところで、夢は寝て見るものという通念からすれば、寝られずして夢を見るというのは、明らかに事理に矛盾する。だから、源承もその意味的な接続関係の矛盾を見咎めて、「詞つづき不レ宜」といったと考えられる。⑦の「軒の草」を聞きとがめているのも、歌の字数上の制約があるからとはいえ、「軒の下草」とあるべきものを、ただ「軒の草」といったのでは、意味的に不明確になるし、趣も乏しくなることを指摘したかったのであろう。⑥の「君が代は末の松山」の歌は、長久二年二月の弘徽殿女御歌合において、すでに「歌の姿はいとをかしう、敷島の大和言葉など見え侍れど、男女いかにぞやある恨み歌と覚えて、祝の方には聞えず」と評せられている歌だが、金葉集撰者はそういう末梢的な非難を意に介しなかったか、これを勅撰集の賀部に採り入れた。確かに、この歌は「姿をかしく」声調的な面ではむしろなだらかである。けれども、この賀歌が、事もあろうに、「君が代は」に「末の」などという忌まわしい詞を続けた、その意味趣向上の不用意な接続を、源承らは再び問題として、「かかり」がよろしくないとか、「詞のかかり」にはよくよく注意しなければならないとか言っているのであろう。また、⑫の諸語句うちの「鐘の入相」などの表現をいましめているのも、それが声調的に耳ざわりだからというのではあるまい。こういう類の表現は、すでに八雲御抄では「詞のいりほが」としていましめられているものである。[注⑭] すなわち、論理的な意味からいえば、それは普通の言い方で「入相の鐘」というのと同じでありながらも、敢えて「鐘の入相」などという倒置的語序によって、ものめずらしそうな趣向風情に続けなしただけのことである。こういう「いりほが」な詞づかいとそこに構成される姿とに対して、――しかも、そういう心象の表現を必然的要求から創造した人々のそれに対してというよりも、むしろエピゴーネン

たちの無自覚不必要なそれに対して、――源承も不満であったらしい。

以上のごとく、源承が「詞つづき」「つづけがら」を問題にするにあたっては、だいたいに声調的な面からと意味的な面からと、二つの観点があったようである。が、さらに②の「露ふけば」をよろしくないといっているのは、声調的なつづけがらと意味的なつづけがらとの二面にまたがっているかと考えられる。源承口伝によれば、定家もすでに「露ふけにけり」などという表現は庶幾すべきでないといましめているにもかかわらず、②の歌の作者は敢えてその定家のいましめに反撥するかのように、ここにまた「露ふけば」と詠んでいるというのである。「露ふけば」という詞つづきもまた確かに八雲御抄のいわゆる「詞のいりほが」の一種である。[注⑮] すなわち「露」と「更く」との二語は、それぞれの一般概念からすれば、直接的には結びつきそうもないことばである。にもかかわらず、ここではそれを強いて直結させたわけである。その趣向風情の構成的な意図や効果も、気分的にはわからぬでもないが、源承はやはりその尋常でない詞つづきにおける意味の非論理的な飛躍を承認しえなかったのであろう。そのうえに、声調的な面からいっても、「露ふけにけり」と続けばまだしも、「露ふけば」の詞つづきの聞きにくさは、源承として、一層看過しがたいところであったかもしれない。

また③の「そめし秋の」などという字あまりの句をも咎めている。しかし、源承も字あまり一般をすべて拒否しているのではない。[注⑯] 源承口伝で一首全体のなかに必然的に照応融合した字余りの秀歌などをあげて、これを許容している。ただ、③の「そめし秋の」という具体例に対しては、「至要なき」字あまりとして、定家の判詞を肯定しようとするのである。この場合、源承が「そめし秋の」の字あまりを非難する理由は、またおそらくその声調的な詞つづきと意味的な詞つづきとの両面にわたっていたであろう。

また、⑪の「さはりあるらん」に対して、「弱くや侍らむ」と評しているのは、一首の結句として、声調上の語勢が乏しいというのか、あるいは意味的に充実した押し込みが足りないというのか、分明でないが、あるいはこれもその両面にまたがった観点からの評であったかもしれない。

また、⑤の「花見るほどに」に対しては、それが無下に「ただ詞」であることを、⑩の「知りたき」に対しては、それが俗語であることを難じているわけだが、これらは、あるいは唯単に詞そのもの可否を対象にしているともいえないことはない。しかし、源承が「かかり」として問題にしているところは、その大半が詞つづきの場にあったことを思えば、これらもおそらく単に「ただ詞」「俗語」であるが故にというのみではなくて、それが前後の詞つづきに照応し関連するところの姿が、声調的にか意味的にか、好ましくなかったのであろう。

更に、⑧における「うき人さへやころもうつらん」をめぐっての問題などは、果して従前の詞つづき・つづけがらという概念で律しうるものかどうかさえが疑問である。⑧の歌はその注に示したごとく、九条内大臣基家の自讃歌であったらしい。その歌の中の「うき人」は、歌の中の主人公にとっての「うき人」である。その「うき人」さえが、今はこの明方の月光のもとで衣を擣っていることだろうかと詠んだ歌である。歌はもちろん創作であり、虚構が許される。この歌においても、衣を擣つ「うき人」のことを思いやっている主人公は、作者の内大臣基家自身でなくて、作者以外の下賤な男のことと解釈してよいはずである。けれども、衣笠内大臣家良は、この歌の中の主人公を基家自身と見做して、その正二位内大臣基家の傾城ともあろう高貴な女性が、世俗巷間の女性のように、衣を擣つなどという、はしたないすさびをするはずがない、という筋道から、これを「無下の傾城かな」と皮肉ったわけである。そして、源承もその家良の批評を肯定し、為世も「歌は作者によりて用意のあるべき」ことと考えているのである。源承もこの歌が世に秀逸と評価されていたことを知っているし、為世もこの「歌ざまはめでたく侍らめ」と認めている。そうでありながら、源承や為世がこの歌を難じたのは、歌は虚構が許されるとはいえ、作者の身分や人柄にとって不相応な事柄や振舞は詠むべきでないという観点からである。これはどうみても従来の詞つづきだけの範疇で律しうる問題ではなくて、むしろ歌の位とでもいうべきものを問題にしていると認めねばならないであろう。とすれば、源承のいう「かかり」は、更に広くはこういう歌の位などをも含めて律しうる属性のものと考えねばなるまい。

要するに、源承が用いた「かかり」という語の概念は、その大半が「詞つづき」という属性をもつことが確認されるのだが、しかしそれらにおける詞つづきなるものは、また単にその声調的な面の属性だけでなく、その意味的な、さらには風趣的な面の属性をも内包し、むしろその後者の方が多量であったとさえ認められる。一般的にいって、もし、そのように詞つづきの意味的風趣的な面の属性に重点が置かれるとすれば、それを「詞つづき」という既成用語で限定すること自体が、すでに十分でも妥当でもありえないだろう。「詞つづき」ではなく、「つづけがら」という既成用語によるとしても、なお適切でありえないだろう。すくなくとも、源承の場合においては、彼が「かかり」という語で意味するものは、一まずは従来の「詞つづき」・「つづけがら」が意味したところの大部分を継承しているが、前述のごとく、それはまた詞つづきの意味的風趣的な面の属性をも、むしろ多分に内包するものであった。のみならず、従来の詞つづき・つづけがら等の語では、いかにしても限定しがたい歌の位などの属性をも含むからには、それはもはや新しいことば、――「かかり」に置き換えられねばならなかったと考えられる。

さらにいえば、従前の詞つづき・つづけがら等は、姿の方法論的属性を限定するにあたって、とかくその原義としての接続という概念の単純性・平面性を忘れ去ることが困難であった。それに対して、源承の「かかり」は、早く一般用語としての「かかり」がもっていた懸りあい・関連などの微妙な機能を継承しながら、詞と詞との相互関連のみならず、心と詞との照応などというところまで、拡げもし深めもして、姿の方法論的属性を限定しうるものである。したがって、それは詞つづき・つづけがらよりも、いっそう有機的立体的内面的であり、時に広くは姿、狭くは趣向・風情などと換言してよい場合さえがある。そうでありながらも、すくなくとも源承のいう「かかり」の本質は、厳密にいえば、やはり姿の属性を、主として詞の側から限定するものであったので、その意味で、姿自体と区別されるのはもちろんのこと、姿の属性を、主として心の側面から限定する趣向・風情とも区別されねばならないと考える。

注①　続古今集・巻四・法印実伊の歌。

②　源家長の歌の全文は「秋の月しのに宿かる影たけて小笹が原に露ふけにけり」（新古今集・巻四）。「前中納言」は定家。なお「露ふけば」の歌は誰の作か不明だが、あるいはこれも家長の歌か。

③　建保五年十一月四日歌合・二番の判詞（衆議判だが、判の詞は後日に定家が書く。）

④　續古今集・巻十七・光俊の歌。なお、これは「年の内はみな春ながら暮れななむ花みてだにもうき世すぐさむ」（拾遺集・巻一・よみ人しらず）を本歌とするか。

⑤　千五百番歌合・百八十番の判詞。源承口伝にこれを六百番歌合とするのは誤。

⑥　「君が代は末の松山」は金葉集・巻五・永成法師の歌。「先人」は為家、「前中納言」は定家、「愚老」は源承。なお、八雲御抄・悦目抄等でも、この歌を禁忌の観点から問題にしている。

⑦　飛鳥井雅有の隣女和歌集に見える歌で、正中元年の詠。なお、「軒の草」と詠んだ例は勅撰集には見られない。

⑧　九條内大臣基家の歌で、弘長二年の三十六人大歌合などにも採られている。「衣笠内府」は家良。なお、この歌については、為世の和歌庭訓にも、「故九條内府の御自讃歌に、『明がたのあまのとわたる月影にうき人さへや衣らつらむ』と侍るを、故入道民部卿為家は『無下の傾城かな』と難ぜられたり。げにも人に心をつくさせて恋らるるほどの人の、手づから衣うたむこと心うく侍るべくや。いはむや作者、後京極攝政の御息、正二位内大臣ほどの人の御傾城、さるすさみやは侍るべきにや。但、歌の習ひ、さのみこそ侍れ。ただ大かたの事にてこそはあらめ。必しも作者の御傾城としもや申侍るべきとのがれ侍るべきにや。しかれども、歌は作者によりて用意のあるべきとぞ承り侍りし。御歌ざまは目出度こそ侍らめ」などと見える。

⑨　誰人の作か、未詳。

⑩　千五百番歌合・七百七十一番の判詞（定家判）。なお、「かく初五字」のところ、千五百番歌合では「加之初五字」とある。日本歌学大系本源承口伝の「かく」は「加之」の誤字または誤植であろう。

⑪　誰人の作か、未詳。

⑫ 尊海は、代集に、南都現存集の撰者として見える人か。

⑬ 「歌の五文字と童女の頭とはすべらかなるべし」（袋草紙所引・大宮禅師懐円の詞）

⑭ 八雲御抄では、これに類する「詞のいりほが」の例としては「霧のありあけ」「風の夕ぐれ」などをあげている。なお、八雲御抄でも、「いづれの詞もつづけがらによるなり」という考え方に立っているので、同書で「詞のいりほが」というのは、詳しくいえば、「詞つづきのいりほが」の謂であろう。

⑮ 八雲御抄でも、これに類する「詞のいりほが」の例としては、「露ふけて」「雲たけて」などをあげている。

⑯ 字余りについては、古くからの歌合判詞でも、これを一律には咎めていない。また、源承の父為家も、「字のあまりたるによりてわろくなるべきにはあらず。しなしやうにて、てづつになるが故に、聞きにくきなり」（詠歌一体）という見解をもっていた。源承の字あまり観もまたそういう見解を継承していたらしい。

×

いうまでもなく、源承は藤原為家の二男であり、早く出家したが、歌学については祖父定家・父為家・兄為氏らの訓説を受けている。注① その源承が「かかり」という語を、その歌論のなかに、どこから持ち来ったかは、明らかでない。最初に述べたように平安貴族社会の一般的な意味の「かかり」という語の用例のなかにも、いささかは風姿の義の「かかり」に転成する可能性が含まれていたかもしれない。しかし、それらの「かかり」が源承歌学の用語のごとくに特殊化し切るためには、なお大きな距離が感ぜられる。あるいは、その間に、能勢博士の想像されたように、このことばの庶民的世界での育成という条件が必要であったかもしれない。注② たとい、そうであっても、源承がその歌論のなかに、しかも歌の基本的な要素たる姿の方法論的属性を説明するために、「かかり」という新しい概念を持ち込んだことは、単に源承歌学の一特色というにとどまらず、和歌史の展望にとっても看過しがたいところである。

次に、源承歌論における「かかり」の後世への影響を考えると、源承は父祖の定家為家らの家説を直接に学んだとはいえ、家督ではなかったので、その影響も過大視すべきではあるまい。したがって、後に二条家歌学の正統に学んだはずの

良基も、源承の用いた「かかり」に気づかなかったというばあいも考えられる。けれども、源承は在世中その博識多才をもって、二条家正統歌学の擁護のために、庶流や他家の人々と激しくわたりあっており、そういう点では、まず二条家正統派から高く評価されていたはずである。したがって、二条派の歌学が生きのびているかぎり、源承の所説や用語の影響が、その死後どこにも波及せずに終ったとは考えられない。事実、源承和歌口伝という書物も、今日まで幸いに伝存しているのである。のみならず、風姿の属性を意味する「かかり」という術語も、源承以後は良基に至るまで、すっかり影を消してしまっていたわけでない。すなわち、その間においても、反京極派の人の手になったと考えられる歌苑連署事書の中に、ただ一例だけではあるが、風姿の属性を意味する「かかり」という語が用いられている。すなわち、そこでは、玉葉集中の為子（為教女）の

雨の足もよこざまになる夕かげに簑ふかせ行く野べの旅人

という歌をとりあげて、「人しれずまたよこぎる様の詞をこそこのまれにけれ。簑ふかせ行く、かかりいとこひねはがず」と難じている。この唯一つの例から、歌苑連署事書における「かかり」の概念を詳しく把握することはむつかしいが、これも大体には風姿の属性を意味すると見てよかろう。すなわち、「簑ふかせ行く」という句の姿において、その生硬な詞つづきと、それが構成する余りにも現実的な風趣とが、庶幾せられないというのであろうから、その「かかり」の具体的属性も、源承の口伝に見られた「かかり」のそれから逸脱するものではあるまい。

また、良基は周知のごとく二条派の歌風を継承したのみならず、極めて博学であり、むしろ一党一派にとらわれない立場から諸書に広く目を通している。そういう彼が源承和歌口伝や歌苑連署事書を一瞥もしていなかったとは、むしろ考えにくいのではなかろうか。しかも、とくに源承口伝中の若干の記事は、良基の歌の師、頓阿の著した井蛙抄には、あきらかに引用紹介されているのである。[注③] だから、良基が源承口伝を一見する可能性は、むしろ多分にあったと考えられる。たとい、良基が直接に源承口伝を見る機会をもたなかったとしても、「かかり」という和歌評論の用語は、すでに源承口

伝から歌苑連署事書などを経て、細々とではあったかもしれないが、歌人の一部では、引いてはこれらの歌書を読んだことのある連歌師の一部では、その命脈を保っていたであろう。良基が彼らを通してでも「かかり」という歌学用語の存在を耳にする機会は、十分にありえたであろう。そのうえに、源承が用いた「かかり」と良基が用いた「かかり」とは、全く流れを異にしたものの偶然の一致などというには、―広狭の程度の差はあるにせよ―質的にあまりにも似すぎている。すくなくとも、すでに見てきたように、源承和歌口伝における「かかり」の属性は、良基がその連歌論書や歌学書の中に、

上品の連歌は、（中略）風情あくまでも新しく、詞幽玄に、かかり面白かるべし。（知連抄）

詞やさしくかかり面白くする人は、花の句ならずとも面白かるべし。（九州問答）

所詮、連歌のかかりといふは詞なり。（九州問答）

連歌はかかり姿を第一とすべし。いかにめづらしき事も、姿かかり悪くなりぬれば、さらに面白くも覚えず。（連歌十様）

先達を捨てよと教ふるは、かかり風情なり。意地は同じものにてあるべきにや。（十問最秘抄）

長高く病なくかかりよきを晴の歌とは申すべし。（近來風体抄）

連歌はかかり第一なり。かかりは吟なり。吟はかかりなり。（梵灯庵返答書所引・良基云）

などと繰返しているところの、その「かかり」の源流たりうる属性を、基本的に内包するものであったと考えられる。

注① 源承の伝・歌風・歌論については、従来不明なところがすくなくなかったが、石田吉貞氏「法眼源承論」（国語と国文学・昭和三十一年八月）、福田秀一氏「歌人としての源承」（和歌文学研究・昭和三十三年一月）、同氏「和歌口伝の著者源承の作歌生活」（国語と国文学・昭和三十三年九月）等の論考によって、しだいに明らかにされている。

② 源承前後の連歌の世界にもすでに特殊用語化された「かかり」の存在は想像される。しかし、その頃の連歌の現存資料は乏しいので、源承がそこからこの語を拾い上げたかどうかは確認しがたい。

③ ただし、「かかり」という語自体は、井蛙抄には引用されていない。